

3. 自身も癌治療の経験者であり、治療中の白血病患児を持つ母親の心理変化

植原 園美, 富澤美由紀, 高田 幸子

(群馬大医・附属病院・看護部)

近年は小児白血病に対して化学療法や骨髄移植など、医療技術は日々進化している。しかし白血病と聞くと完治が困難であるというイメージを持つことが多く、患者のみならず家族も多大なショックを受ける。特に母親は患児の疾患・治療に対する不安や心配のみならず、闘病生活により母親役割の変化が生じる。

家族が子供の疾患を受け止める過程についてパトリシアらは「混乱」「拒否」「恐怖」「怒り」「自責」「悲嘆」「希望」の段階があると述べている。今回自身も癌治療の経験者であり、白血病の発症により化学療法や骨髄移植をひかえる患児をもつ母親と関わる機会をもち、日々のコミュニケーションの中では母親の精神的な負担が多たであることが伺えた。そこで母親との面談内容をプロセスレコードにおこし精神面を分析することにより、母親の心理のプロセスを把握し、精神的負担を軽減できるような関わりが出来ないかと考えた。

プロセスレコードをパトリシアらの受容過程にあてはめて分析した結果、母親は子供の疾患告知当初、「混乱」の段階となり、精神的疲労を軽減できるよう積極的にコミュニケーションを図るように心がけた。その中で、母親は自身の経験から化学療法による副作用で様々な苦痛が生じることを理解されており、治療しなければ治らないと思う反面治療の辛さを理解しているからこそ我が子に同じ苦痛を味合わせたくないという気持ちの葛藤がある事に気付くことが出来た。これにより、不安な点はすぐに解決出来るようバックアップ体制を整えた。すると、徐々に悲観的な言動がみられなくなった。その後は自身の経験を生かし、子供の治療中意欲的に介入する姿もみられ、徐々に自身の経験が子供の治療に役立つことを理解し始めるとそれが自信となったためか「怒り」「自責」「悲嘆」の段階ととれる言動の表出なく、退院後の生活について希望を抱く言動が多くなっていったことから、通常の心理のプロセスを通るよりも早期に子供の疾患を受け入れることができたと考える。

4. 看取りのパス（やすらぎのパス）の効果的な使用を目指して ～看護スタッフの看取りのパスの認識度調査からの取り組み～

小林 加奈, 高橋 明子, 吉澤 幸枝

熊谷有希子, 丸山 広貴, 平井 尚子

櫻井 史子, 星野 理恵, 羽鳥裕美子

大内 悦子(国立病院機構 高崎総合医療

センター 看護部 緩和ケアチーム)

【はじめに】 人生の最期を迎える患者に、亡くなる直前まで必要以上の医療行為や処置が施され、曖昧な方針の見直しや話し合いがされぬまま看取りの時期を迎えることがあ

る。看取りの時期のカンファレンスや安楽を最優先に考えたかかわりを目指し、院内の看取りのパスが作成されているが実際は十分に活用されていない。看護師の看取りのパスの認識を調査して、効果的な周知を実施していきたいと考え研究に至った。【目的】 看取りのパスを活用し、充実したカンファレンスが実施されることにより、患者・家族が安楽に過ごすことができる。【方法】 1. がん終末期患者にかかわる当院看護師(226名)へ質問用紙でのアンケート調査 2. 解決策を立案し周知徹底を実施 3. 再度、がん終末期患者にかかわる当院看護師(223名)へ質問用紙でのアンケート調査 研究期間: 平成27年10月～平成28年1月 【結果】 アンケート回収率は前半92.3%、後半77.5%だった。1回目調査より、パスの認知が不十分であり、目的、運用方法、対象者が理解されていない現状と使用経験のあるスタッフが限られた病棟のみであることが把握できた。結果から、取り扱い説明書の周知徹底、目標や活用方法についてリンクナースがスタッフへ周知した。病棟会・チーム会・カンファレンス・個別指導を繰り返した。2回目調査では、使用目的、運用方法の認知が上昇した。パスの使用経験には変化がなかった。【考察】 現状把握からスタッフへの周知徹底により、看取りのパスの認知が高まった結果となった。パスの使用経験には変化がなかったため、実用化においてはリンクナースを対象を抽出し、スムーズに導入・運用できるように働きかけていくことが必要である。看取りのパスを使用していくためには、患者や家族と医療者の信頼関係がとても重要と考える。継続した周知徹底により介入を広げていくことが今後の課題であり、看取りのパスの理解を深めることで、対象へのスムーズな介入に繋がると考える。

5. 家族の強みを生かした終末期がん患者のケア

山田 香, 吉田 一恵, 原澤 梢

原 真由美

(独立行政法人国立病院機構 沼田病院)

【はじめに】 終末期がん患者の多くは何らかの苦痛を有し、それを見守る家族は精神的な緊張を強いられている。今回、私たちの働きかけで家族の緊張を解き、より多くの安らぎを患者にもたらすことができた。この事例を振り返り、考察する。【患者紹介】 A氏: 60歳代の男性。家族構成: 妻と2人暮らし。長女・長男は県内在住。妻は毎日来院し、長時間面会を行う。病名: 下行結腸癌術後 肝臓・肺転移。【経過】 手術、化学療法を実施したのち、本人の希望で治療を中止した。食欲が低下し、体動困難となり入院となった。腹部疼痛に対してオピオイドが開始となったが、A氏の状態悪化に伴い、妻からの不安の訴えも増強していった。【看護問題】 患者家族の不安が増強すると、A氏夫婦の穏やかな時間を過ごすことが困難になる。【介入・結果】 A氏は苦痛が日々強くなり、妻はその苦痛を軽減してあげたいとA氏への援助を行っていた。妻の「少しで